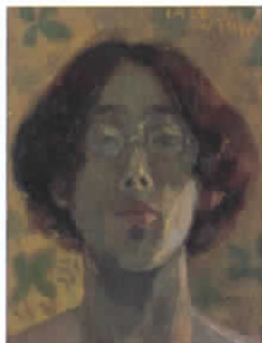


中越地震から10年・法隆寺展などもりだくさん

今年の中越地震から10年目となります。多くの被害をもたらした山古志地区の全村避難など、直下型地震の被害の大きさに驚き、対応に追われたことを、昨日のことのように思い出します。この10年は中越地震から10年を大きなテーマとして展開します。

生誕120年 宮芳平展



宮芳平(自画像)
1914年 安曇野市豊科近代美術館蔵

まず4月26日から6月1日まで「生誕120年 宮芳平展 野の花として生きる。」を開催します。宮芳平は1893(明治26)年に魚沼市堀之内に生まれ、東京美術学校(現:東京藝術大学)に入学、第9回文展に初入選を果たしました。その後美術教諭の傍ら作品制作を続け、戦後国画会に出品して同会会員となりました。本展は当館も企画から参画して全国5会場で開催されるものです。宮芳平の初めての本格的な個展で、当館所蔵の「聖地巡礼シリーズ」など油彩画のほか、素描、銅版画、ペン画など、宮芳平の全貌を紹介します。ちなみに芳平の甥・宮柊二は會津八一のあとに新潟日報の歌

壇選者を務められた歌人です。

7月5日から8月17日に、「東日本大震災復興祈念・新潟県中越地震復興10年 法隆寺 祈りとかたち」を開催します。この企画は足掛け4年がかりでようやく実現したものです。

昨年はフェノロサと岡倉天心が奈良の古社寺を調査して130年、赤倉で天心が没して100年という節目でした。古社寺調査を展覧会の柱にしたいと、東京藝術大学大学美術館に藤田学芸課課長と訪ね企画を相談したのが3年前の3月11日でした。藝大側も古社寺調査の企画展を検討しておられ、お互いの意向が一致して企画をまとめることとなりました。相談が終わり国立西洋美術館のレナブラント展開場式に二人して参加したその時、東日本大震災の大きな揺れに襲われました。二人とも翌日深夜まで新潟に戻れませんでした。

3月から仙台で、4月からは東京で、そして当館の開催となります。

法隆寺 祈りとかたち



〈国宝 地藏菩薩立像〉
平安時代 9世紀 法隆寺蔵

法隆寺は607(推古15)年に聖徳太子によって建立された寺院です。本展は法隆寺が670年に全焼し、太子信仰寺院として復興していった歴史を踏まえ、また東京美術学校との130年にわたる交流の歴史を振り返りながら、国宝《地藏菩薩立像》をはじめとした、法隆寺信仰を示す様々な美術品を一堂で紹介する展覧会です。とくに第3章の「法隆寺を描く」は、当館が中心となってまとめた章です。なお法隆寺の大野玄妙管長にはお父様が長岡市出身ということで縁もあり、展覧会実現に大きなお力をいただきました。

黒井健 絵本原画の世界展



「ふる里へ」小学館
©Ken Kuroi/KEN OFFICE, 2006

続いて9月12日から11月3日に、「中越地震復興10年 画業40周年記念 黒井健 絵本原画の世界展」を開催します。黒井健は1947(昭和22)年に新潟に生まれ、新潟大学卒業後、出版社で絵本の編集に携わり、1973(昭和48)年にイラストレーターとして独立しました。『ごんぎつね』、『手ぶくろを買いに』、『ころわん』などの絵本はお子さんが小さいときには一度は手に取ったことがあると思います。本展では画業40周年を記念し、絵本原画の代表作を紹

介するとともに、新潟県中越地震のあとに故郷を訪れて描いた『ふる里へ』も展示されます。

コレクション・ストーリーズー11年の物語



エドゥアール・ヴエイヤール
(風景と室内) (1896-99年)より
[6/バラ色の壁紙のある室内1] 当館蔵

そして、年度末の2月3日から4月5日には、昨年の開館20周年を節目に「コレクション・ストーリーズー11年の物語」を開催します。当館の所蔵の名品とこの11年に収集された作品を紹介し、新収蔵作品約2,000点の図録も制作したいと思います。

今年も展覧会とともに万代島美術館、美術館友の会や大学、学校と協働して教育普及事業や地域との交流連携もさらに進めたいと思います。なお6月1日には近隣のハイブ長岡で天皇皇后両陛下にご臨席いただき全国植樹祭が行なわれます。なにかと長岡が目される1年となります。近代美術館をその一つにしていきたいものです。皆さんのお力添えをお願いいたします。

(館長 徳永健一)

NIIGATA アートリンク 2014

新潟県立近代美術館、新潟県立万代島美術館、新潟市美術館、新潟市新津美術館、4館のネットワーク「NIIGATAアートリンク」。「新潟の美術館をもっと楽しく、面白く」を合い言葉に、今年も活動していきます。スタンプラリーも実施予定。詳しくは各館のチラシをご覧ください。



宮芳平と柏崎

かの明治の文豪・森鷗外に愛され、短編小説『天龍』の主人公M君、それが魚沼市堀之内出身の洋画家「宮芳平」のことだとご存知でしょうか。

東京美術学校時代の1914(大正3)年、東京大正博覧会で《カーテンに》が入選し、同年の第8回文部省美術展覧会に意気軒昂として《椿》を出品するが落選。「おれの絵のどこが悪い?」と納得いかず、芳平は審査委員の鷗外宅を訪ねます。以後、庇護を受け、『天龍』のM君とされていくのです。

こうした芳平を育んだのは、出身の堀之内であり、中学(旧制)期に下宿した柏崎での生活でした。1893(明治26)年に生まれ、魚野川で遊び、優秀な成績で、尋常小学校高等科2年で父の実家のあった柏崎中学に進学した芳平は、柏崎で生涯の友や先輩、師に恵まれ、美術に目覚めていきます。日本海の大海原が広がり、そこに沈んでいく夕陽の美しさに魅了された芳平は、後年の《落日の嘆美》などへ、その情景を描きこんでいます。

柏崎との強いつながりは、芳平の初個展が1919(大正8)年柏崎で開催されていることから窺えます。美術への理解があった比角村長(大正15年に柏崎町と合併)洲崎義郎らの支援を受け、比角小学校で同年9月を初め、3年連続で開催されています。

また、絵の師として心に刻まれる中村彝を紹介されるのも、この洲崎を通してであり、柏崎は芳平にとって生涯、心の故郷でありました。

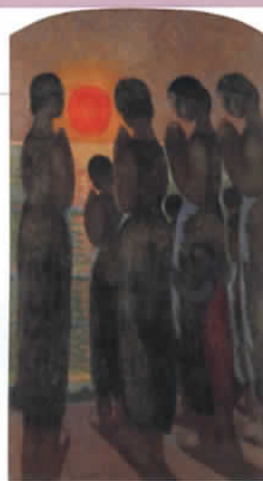
一方、出身地、堀之内とは、兄たちを通じて繋がりも切れず、芳平の兄(甥の歌人・宮松二の父)が起業した丸末書店は、現在も営業されています。

「野の花のように」生きた一人の県人作家の故郷への思いを感じながらご覧ください。

(専門学芸員 松矢国憲)



宮芳平《椿(旧題「愛」)》1914(大正3)年
安曇野市豊科近代美術館蔵



宮芳平《落日の嘆美》1916(大正5)年
鎌馬区立美術館蔵



宮芳平《野の花々》1914(大正3)年 柏崎市立比角小学校蔵

この夏、法隆寺さまが丸ごとやってくる!

この夏、近代美術館に国宝《地藏菩薩立像》が奈良の法隆寺からやってきます。法隆寺は607(推古15)年に創建された日本を代表する古刹で、1993(平成5)年には日本で初めてユネスコの世界文化遺産に登録されました。法隆寺に伝わる文化財は数万点にも及びますが、中でも《地藏菩薩立像》は人々の苦しみを一身に受けて、人間界のみならず六道の命あるもの全てを救うと言われるほどの、たいへんありがたいものです。2m近い大きな像ですが、台座を含めて全身を一木から彫り出していて、平安時代を代表する木彫像と言えるでしょう。東日本大震災から3年、新潟県中越地震から10年というこの年に、いたましくも被災された方々の鎮魂のために特別に出品されるものです。《地藏菩薩立像》ではありません。《菩薩立像》(重文)、《観音菩薩立像》(重文)、《薬師如来坐像》(重文)、《阿



和田英作《金堂落慶之図》1918(大正7)年 法隆寺蔵

弥陀如来坐像》(重文)、《十六羅漢像》(重文)などの至宝や、《胡面水瓶》(重文)、《能楽面》(重文)などの工芸品、そして庄卷は洋画家で東京美術学校長も務めた和田英作の幅4mを超える巨大な絵画作品《金堂落慶之図》(1918[大正7]年)も出品されます。まるで奈良の地から法隆寺さまが引っ越してきたかのようなのです。この夏、長岡で法隆寺さまに満たされてみませんか。

(学芸課課長 藤田裕彦)



《国宝 地藏菩薩立像》
平安時代 9世紀 法隆寺蔵

岩田正巳と日比谷公園



岩田正巳《初秋》1923(大正12)年



日比谷公園の鶴の噴水(2月5日撮影)

今年は寒い冬でした。長岡の積雪は例年より少なかったようですが、関東甲信地方では記録的大雪となり、大きな混乱を来しました。当館で3月1日から開催した「生誕120年 岩田正巳展」では、作品借用を2月上旬までに完了していたため問題ありませんでしたが、ここに記すのは、その作品借用のために東京に出張した時のことです。

夕方、ホテルに着いてテレビをつけると、日比谷公園の噴水に大きなツララができたことがニュースで報じられていました。東京の冬の「風物詩」なのだから。しかし、テレビの画面を見て驚きました。正巳の絵に出てくる噴水だ！ということに気づいたのです。

日比谷公園の雲形池にある噴水は、翼を広げた鶴をブロンズでかたどったもので、1905(明治38)年頃、東京美術学校の津田信夫と岡崎雪声が依頼を受けて制作しました。公園等の装飾用噴水としては、国内で3番目に古いのだそうです。

その噴水を描いた正巳の作品は、『初秋』と題し、1923(大正12)年の第3回新興大和絵会展に出品されました。洋傘をさす少女たちが木々の葉の色づく公園を散策する様子を描いたものです。当時正巳は29歳。彼は大正2～7年に東京美術学校に在籍しており、母校の教師たちが制作した噴水であることも意識して描いたのかもしれませんが。

ニュースを見た次の朝、少し時間に余裕があったため、正巳に導かれるような思いで、日比谷公園を歩いてきました。写真は、作品借用に同行した伊澤学芸員が撮影したものです。若き日の正巳が、画題を求めて日比谷公園を訪れ、スケッチブックを開いている姿が目につくようでした。

(主任学芸員 長嶋圭哉)

わたしとこの1点

橋本龍美《風之唄》

「この1点」といわれると、どうしてもこの作品になってしまうのです。

なぜか。それは、美術館への来館者の方々との語り合いながら、何年もかけて、筆者の中で成長してきた絵だからでしょう。

地元、加茂市出身の作家・橋本龍美さんが描いたこの作品は、六千点ある当館の全所蔵品の中で、最近ハヤリの「対話型鑑賞」に、最も適したものだと思います。描かれているものひとつひとつは、一見とてもわかりやすいのに、実は絵の中にはとてもたくさん謎が隠れているからです。

鑑賞活動の導入として、はじめは、お地藏さんの数を尋ねました。相手は小学校3年生。左端のお地藏さんの顔がキツネの顔

をしているので、4体あるいは5体という答えが返ってくるだろうとタカをくくっていたのです。ところが、返ってきたのは、ゼロ体から五体まで様々。自分が鑑賞のナビゲーターでありながら、解釈の多様さ、自由さに目を見はることになりました。そのうち、その他のたくさんのヒミツにも気づくことになり――。

最近、この作品を使った対話型鑑賞に今ひとつ新鮮さを感じなくなってきたのは、この絵のヒミツを知りすぎてしまったせいかもしれません。ああ、次の「この1点」を探さねば……。

(学芸課課長代理 宮下東子)



橋本龍美《風之唄》1981(昭和56)年 当館蔵



昭和の美術

1945年まで—(目的芸術)の軌跡

会期: 2005年11月3日~12月11日

欠落した図録。それは図録ながらも肝心の図版がなく、代わりに大きな余白が堂々と横たわった頁があるからです。もちろん意図したことではなく、掲載の許可を著作権者から得られなかったためでした。

この展覧会は、昭和初期の美術界に顕著なプロレタリア美術と戦争美術を「目的芸術」と捉え、その類似性と連続性を問うものでした。両者はいわば左右両極のイデオロギー美術ゆえ、そのどちらにも寄らず等距離から語ることを基軸として、作品の出品と掲載、原稿の依頼などに努めましたが、時に理解を得られない場面に直面しました。その象徴が、この「余白」です。

皮肉にも、それらの余白にあるべき作品

は、展覧会の構成上無くてはならぬ存在でした。されど、紙上では不在であれ、作品そのものは確かに展示室に存在したのです。ここに、展覧会と図録をめぐる特殊な関係を見ることが出来ます。

展覧会は、総じて短期間で消滅する定めにあり、よって図録の存在意義は何よりその記録にあります。その意味で、本展の場合、図録としての役割は完全には果たされていないこととなりますが、反面、展覧会をめぐる実情をありのままに記録しているともいえるでしょう。この余白は、当時の苦い記憶として、また今後も克服されない一事として、私自身に様々な問いを投げかける存在でもあります。

(学芸課課長代理 澤田佳三)

キンビのおすすめ

01 皆様は当館のイベントに参加されたことはありますか？名画や珍しい映像を上映したり、コンサートを開いたり、そして、開催中の企画展に合わせて当館学芸員、あるいは専門家の方をお招きして講演会を行ったりしています。まずは作品鑑賞をし、講演会で知識を得てそれをふまえて再びじっくりとご覧いただくと、新しい発見があり、観え方がガラッと変わるかもしれません。イベント情報は館内の掲示やチラシ、ホームページにてご案内しておりますので、ご家族、お友達とお誘い合わせのうえ是非ご参加ください！

また、講堂、講座室、ギャラリーは貸出しもっておりますので、お気軽にお問い合わせください。(元嘱託員 中島結衣)



講堂での当館学芸員による講座

02 当館のエントランスでは《カリアティードとアトラント》という作品が皆さんをお迎えしています。一見、西洋の人物像柱と素通りされてしまいそうですが、作者はオーギュスト・ロダン



オーギュスト・ロダン《カリアティードとアトラント》
1876年頃 当館蔵

ン。近代彫刻の父と称された彫刻家です。

ロダン作といえは《考える人》などのブロンズが有名ですが、この作品は細かく砕いた石を漆喰と混ぜたものを使用しています。技法的にも珍しいもので、とても貴重な作品です。

カリアティードとは女性人像柱、アトラントとは男性人像柱を意味します。気品と力強さを兼ね備えたこの三体の像は、近美の入口を美しく飾っているようです。

生き活きと動き出しそうなロダンの作品は、当初「体から直接型取りをしたのでは？」と疑われるほど、人体の本質に迫るものでした。皆さんの目にはどう映るでしょうか？是非、実際の作品を見て、確かめてみてください。(嘱託員 今井ひとみ)

編集部からのひとこと

今回は、新潟出身の作家と、場所とのつながりについて特集しました。何気なく通り過ぎていた場所も、作家の作品を通すことで、新たな発見が見えてくるのかもしれません。岩田正巳と宮芳平、入学した科は違えども、東京美術学校(現:東京藝術大学)の同級生だった二人。そんな二人の展覧会を、比べながら味わってみてはいかがでしょうか。

(美術学芸員 伊澤朋美)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第42号

編集・発行

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL 0258-28-4111代 FAX 0258-28-4115
http://www.lalanel.gr.jp/kinbi/ e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷
発行日

株式会社 山田写真製版所 〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14
2014年4月1日